

第2学年 国語科学習指導案

1 単元名 「走れメロス」

2 単元目標 描写や会話に着目して人物像の変化を捉え、作品を読み味わうことができる。

作品を読み、登場人物の行動や考え方について、自分の考え方をもつことができる。

3 単元について

本作品は、自分の身代わりとして人質となった親友セリヌンティウスとの約束を守るため、様々な困難を乗り越え、定刻までに王城に辿り着こうとするメロスの姿を描いた物語である。ストーリーの展開とともに、登場人物たちの葛藤、苦悩、変化がドラマチックに描かれ、メロスを取り巻く人間像が様々に変容していく。また、間接的な心理描写が多く見られることから、読み手から多様な解釈を引き出すことが期待できる。

本作品『走れメロス』は、ドイツの詩人・シラーの『人質譚詩』をもとに執筆されたものであることが明らかになっている。しかし、『走れメロス』と『人質』を比較してみると、太宰によって多くの加筆がなされていることが分かる。登場人物の性格についての詳細な描写、物語の新たな展開など、様々な改変点も見られる。このような「違い」にこそ、この作品に対する太宰の思いが込められていると推測できる。共通点や相違点を整理し、なぜこのような加筆や改変をしたのかを考察・検討することで、作品のテーマに迫ることができると思う。

本単元においては、「読むこと」の指導事項「イ文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。」及び「ウ文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。」を主軸とし、言語活動例「ア詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流すること」に基づいた「登場人物の紹介文を書く」という言語活動を設定する。授業にあたっては、『走れメロス』と『人質』という2つの作品における相違点について、特に「登場人物像」の違いに着目させながら進めていく。『走れメロス』はメロスを中心とした物語ではあるが、太宰の加筆によって、メロスはもちろん、暴君ディオニスや親友セリヌンティウスらの心の迷いや変容、成長をも読み取ることができる。シラーの『人質』よりも「人間らしい」登場人物たちによって、単なるメロスの物語を超えて、多様な読みが引き出される作品になっているのである。文章の描写の効果や登場人物の言動の意味などを考え、登場人物の紹介文を書くことによって、太宰の「内容や表現の仕方」へのさらなる気づきを深めていきたい。

4 単元の指導目標

ア国語への関心・意欲・態度	1 文章の描写から表現の特徴や登場人物の心情を読み取ろうとしている。【C 読むこと(1)イ】
イ書く能力	1 意見や心情が相手に効果的に伝わるように描写を工夫して書いている。【B 書くこと(1)ウ】
ウ読む能力	1 抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などに注意して読んでいる。【C 読むこと(1)ア】 2 文章の描写の効果や登場人物の言動の意味などを考え、内容を理解している。【C 読むこと(1)イ】 3 文章に表れているものの見方や考え方について、自分の考えをもっている。【C 読むこと(1)エ】
エ言語についての知識・理解・技能	1 相手や目的に応じて文章の形態や文章表現に違いがあることを理解している。【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項イ(オ)】

5 指導計画（全6時間）

- 第1時 全文を音読し、初発の感想をまとめる。
 第2・3時 感想を交流する。また、「人質」を読んで、「走れメロス」との違いを整理する。
 第4時 「人質」と「走れメロス」を比較することで、登場人物の人物像を捉える。（本時）
 第5時 「人質」を書き換えた作者の意図を考える。
 第6時 登場人物の紹介文を書く

比較しながら読む力の応用として、「走れメロス」のように原作を翻案した作品を複数読み比べ、それぞれの改変にこめられた作者の意図を考えるという単元構想も有効です。

- 6 本時目標 ・「人質」との比較を通して、メロスやディオニス王の人物像を捉えることができる。
 ・班の中での話し合いで、自分の考えをまとめることができる。

7 学習活動の展開

生徒の学習活動	形態	支援と留意点	評価【観点】(方法)
1. 本時の学習内容について知る。	一斉	○前時に整理した違いから、登場人物の人物像について考えること、次時の学習につながる内容であることを伝える。	10の視点⑥ 「比べて読み、違いについて解釈し、意味づける」という言語活動を繰り返し行うことにより、太宰の描きかけた人物像を鮮明にしていきます。さらに、グループで互いの解釈を聞き合い、検討し合うことによって、「読みの力」をさらに高めていきます。 ・先のグループで話し合ったことを、班員に伝えている。
班活動を通して、全員が登場人物の人物像を捉えることができる。			
2. 8つのグループに分かれて、二つの作品の違いについて検証する。	グループ	○あらかじめ決めておいたグループに分かれて話し合わせる。 ○1～3班は「メロス」、4～6班は「セリヌンティウス」、7～8班は「ディオニウス王」についてまとめる。	10の視点⑧ 「違い」を発見する言語活動によって、「なぜそのまま訳さなかったのか」「加筆、改変によって何を伝えたかったのか」という問いを生徒から引き出します。そうすることで、次時は生徒の問いを課題として設定することができ、主体的な取組が期待できます。
3. 班に戻って、それぞれの登場人物の人物像についてまとめる。	班	○2つの作品を比較することによって、より明らかになった人物像についてまとめることを伝える。	
どのようなことが書ければ人物像を捉えたことになるのかを明確にして、評価に位置付け、支援に生かすようにすることも大切です。			
4. 班でまとめた意見を学級全体に発表する。	一斉	○読み取った人物像の妥当性について話し合った上で、班の意見をホワイトボードに書かせる。 ○自分の班と比べて聞くように声かけをする。	【話・聞】(観察) ・話し合ったことをワークシート(ホワイトボード)に書いている。 【書く】(ワークシート)
【改善】「何のために発表するのか」という生徒の目的意識を明確にすることが必要であると考え、班でまとめた人物像を発表するだけでなく、叙述や表現をもとにして、読み取った人物像の妥当性を検証し合う活動を設定した。この活動を通して、互いの解釈を聞き合う中で、人物像をより詳しくとらえ直すことができるようにした。			
5. 本時の学習を振り返り、次時の予告を聞く。	個人	○分かったこと、分らなかったことを具体的に書くように声かけをする。 ○次時は、「人質」を書き換えた作者の意図について考えることを伝える。	